

若者の旅行離れと性格の心理学的特性の関係性

マスコミュニケーションゼミナール 1215118 土屋 拓磨

1. 研究動機・研究目的

近年では若者の旅行離れが指摘されている。海外旅行がより身近なものになっている現代でなぜ若者は旅行に行かなくなっているのか、他の大学生と旅行好きの筆者とでは何に違いがあるのかに興味を持った。近年、若者の旅行離れが深刻化している原因としてはお金、時間によるものが大きいと言われている。その他に旅行頻度に影響を与えるものについて調査したいと考えた。そこで旅行と性格には大きな関わりがあると仮説を立て、検討する。アンケートを実施し旅行頻度と性格特性を調査しその結果を用いて関係性について検討する。

2. 研究方法

本研究では旅行頻度の多い人、旅行頻度の少ない人に対する性格特性を測定するためにネットアンケート調査を行なった。調査対象は、順天堂大学、獨協大学、日本体育大学、中京大学の学生、同年代の社会人 103 人である。調査期間は、2018 年 11 月 23 日から 11 月 28 日であり、メッセージアプリの LINE を利用して筆者の知り合いに依頼して拡散してもらった。

性格特性の質問項目は、心理測定尺度集Ⅱ・Ⅴの中からいくつかの基準で尺度を選定した。旅行動機と心理測定尺度を関連づけ、「ストレスからの逃避、リラックスのため」では、ストレスやリラックスというのは被受容感、思考・内省、これらは心理的なものである。自己隠蔽というのもこれに属すると考える。「目新しい体験をするため」では、目新しい体験というのは日常生活ではないことである。日常による目標損失感があり、反発して探究心、創造性が生まれる。旅行したことによる高い理想追求、客観性、被受容感、自己愛傾向、自己成長、充実感に繋がると考えられる。「同行者との絆を深めるため」では、他人に頼りたい欲求、友人、家族と行くコミュニケーションによる自己統制、表現力、他者受容がある。また友人関係尺度である気遣い、群れもこれに属すると言える。反対に「一緒に行く人がいない」では、「同行者との絆を深めるため」と反対のことが言える。以上を用いて性格特性調査し、旅行頻度の調査と関連性を分析した。

3. 結果と考察

アンケート調査の結果を用いて、「旅行頻度」×「性格特性」の t 検定を実施した。有意差の見られた項目では「私は、本当は周りの人たちが思うよりずっと有能な人間である。」

「私に注目が集まらないのをいつもおかしく思う」(共に自己愛傾向)。旅行は非日常的な体験や出来事が起き、それを経験したことで自らは有能な人間であると考えている人が多いと考えられる。また自己愛傾向の強い人は自己主張が強い特徴があるため、旅行に行ったことで自己主張をできるようになったと考えられる。「色々な考え方の人と接して多くのことを学びたい」(探究心)。新奇性欲求は旅行する理由の新規的欲求によるものであり、これを求めることが旅行の動機と考えられる。「友好的な態度で相手に接する」(他者受容)。この項目では旅行先で友好関係を築けることが一人旅の動機になると考えられる。「冗談を言って相手を笑わせる」(群れ) 集団旅行では旅行先でのコミュニケーション、現地の人との会話など旅行によるユーモアにもものを表現する機会が増えたと考えられる。アンケート結果を用いたt検定による有意差から、旅行は新しい体験、非日常を味わえることが多く、また他者とのコミュニケーションも多くなる。それらが性格に多くの影響を与えていると考えられる。

4. 結論

この結果は、旅行頻度の多い人、旅行頻度の少ない人では性格特性に差があった。また筆者は有意差が見られた項目において全て旅行群よりも高い数値になった。旅行は新しい体験、非日常を味わえることが多く、また他者とのコミュニケーションも多くなる。それらが性格に多くの影響を与えていると考えられる。また「自己愛傾向」「探究心」の消費動向・旅行動機に優位な正の相関関係がある性格特性に有意差が出たことで、旅行業界の事業戦略に役立てられることも検討される。

また本研究は旅行頻度の変化による性格特性の違いを論じてきたが、性格特性の変化による旅行頻度の違いを論じているものではない。自己愛傾向、探究心の項目は旅行群が高い数値を示したが、性格特性があるから旅行によく行くのか、旅行に行ったことによって性格に変化があったのかは研究の限界があり、本研究では立証することはできておらず、そこを明らかにするのは次の課題である。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文を執筆するにあたり、神原先生にはたくさんのアドバイスをいただきました。また日頃のゼミナール活動でも大変お世話になりました。神原先生のおかげで充実したゼミナール活動を送ることができました。この場を借りてお礼を申し上げます。